

ぼくの生きる道

千葉県 浦安市立高洲中学校 1年

小林 想 (こばやし そう)

ぼくは障害者だ。なぜって？わからない。生まれつきそういうことになっていた。今は何とか歩けるが、体のバランスを取るのがすごく難しいし、字が書けないという致命的なハンディキャップを抱えている。

ぼくの一番古い記憶は保育園の時だ。当時三歳以上は同じ部屋で生活していて、その時に、ひとつ年上の子から「想ってなんですぐ転ぶの？枯れたチューリップみたい。」と笑いながら聞かれたことがある。その時ぼくは、「分かんないよ、そんなの。」と答えた。本当の答えをあまり知らなかったからである。

だけど、小学生ぐらいの時に（自分はこういう運命なんだ）と悟った。

運動会の時だ。練習でもうまくついていけなかったぼくは、本番でもダンスの移動を間違えて、大幅に皆より遅れてしまい、大恥をかいた。泣いたりはしなかったが、心の中で叫んだ。「全ては、この不自由な体のせいだ、あーあ、こんな体いらぬよ。」と。

こんな体をもっていて、大変でしょと言う人がいる。もちろん大変だ。例えばいじめ。これは、障害者じゃない人にもあるかも知れないが、それとはわけが違う。障害者に対するいじめは、正直言って「いじめ」ではなく、「差別」だからだ。

ぼくの体験談だが、ぼくは今年、住んでいる市主催のキャンプに参加した。その時の参加者の中で、ぼくが最年長だった。だから、必然的に班長になってしまった。翌日、班員がうるさかったので何回か注意したが、全く効果がない。先生が出る幕だとも思ったが、先生方はちょうど会議中だった。仕方がなくぼくはかなり強く、「おい、静かにしろよ。」と言った。返ってきた言葉は「ウルセーよ。障害者のくせに威張るな。」だった。ぼくにはかなりキツイが、こんなことは日常茶飯事だ。

ここまでネガティブな話が続いたが、しかし、ぼくの人生が暗闇だけかといわれるとそうではない。いい経験もしている。

ぼくは、小学六年生の時に、はじめてサーフィンを体験した。ボランティアのサーファーに教えてもらう機会を得たのだ。

最初に、海の横の湖みたいところで、SAPという棒を持ってボードに立つことを練習して、慣れてきてから本格的に海に出た。周りにはたくさんのサポートしてくれる人が居たので、安心だった。ボードに寝そべって波に乗るボディー

ボードから始め、だいぶタイミングがつかめてきたところで、初めて立つことに挑戦した。・・・もちろん、失敗。波が押してくる中、ボードが傾かないように調整し、立てるほど、ぼくは器用じゃない。何回も落ちて、溺れそうになって、這い上がって辞めたくもなったが、コーチは諦めることを許さなかった。「障害に甘えるな、やれば出来る。お前なら出来る。どうしてもものところは手伝ってやるから。」と。でも、時間がたつほど、ぼくの足は重くなる。体力の限界が近づいていた。ぼくは、コーチに後五回でやめさせてくれとお願いしてしまった。その五回のうちの二回目、コーチが「いい波が来た、いけるぞ、想。」と叫んだ。ぼくは、最後の力を振り絞り、今まで教えてもらった通りに立つ準備をした。全身の力をひざと足に集中させて立つ。

・・・立った。生まれて初めてのスローモーションだった。すごいぞ！立った！このぼくが波に乗ったんだ！・・・

あれ？と気づいた時には、板から落ち、水の中だった。海から出た時はもうフラフラだったが、とても気分が良かった。波に乗っている時の風、海の音、すべてが爽快だった。そして、何よりも自分に自信がもてた。このぼくが、サーフィンが出来たんだ、最初は、何も出来なかったけど、頑張れば出来るんだ。障害なんて関係ない、要は自分がやるか、やらないか、出来ないことなんて何もない、もう何も怖くないぞ、とこの経験でそんな自信を得ることが出来た。これも教えてくれたコーチやサポートの方達の支えがあったからだと思う。

ぼくは障害者だ。たくさん嫌な思いをしてきたし、大変な思いも常にしている。でも、おなじくらい人から優しくされてきた。だから、何とか毎日元気に過ごせている。すべての人が相手を思い、優しくしたり、むやみに人を傷つけることをしない社会になればいいと切に願う。そしたら、どんな人もその人らしく生きることが出来ると思う。

これからぼくは、周りの方への感謝を忘れずに、不自由な体とうまく付き合い、少しの手助けは必要だけれど、やれば出来るという自信をもってやっていきたいと思う。障害があろうがなかろうが、ぼくらしく生きていく。時に少しブサイクだろうが、それがぼくの生きる道だ。